

あなたにとって パートナーシップ

パートナーは彼氏、何でも聞いてくれる。パートナーシップとは、自分ではよく分からないけれど、お互いに尊重し、助け合えるということかな。

(森町 24歳 女 福祉サービス業)

相手のことを思いやり、協力して事がうまく運ぶように努めること。事を成すのに役割を分担して行う相手。

(静岡市 39歳 男 会社員)

同じ目標に向かって、その目標を達成するために、力を合わせ補い合っていくこと。人生においては、夫や家族、仕事や何かの目的で集まった組織。団体の中ではその仲間。

(静岡市 34歳 女 主婦)

基本的には夫ですが、成人した子どもや友人も、広い意味で考えれば、パートナーだと思っています。自分の人生を自分らしく豊かに意義深くするための伴走者だと思います。

(伊東市 48歳 女 自営)

その時々によって違うと思います。ある時は夫であり、友達、子どもでもあると思います。

(相良町 43歳 女 主婦)

共に意見を交わし合い、一つの目的に向かって行動する人。

(長泉町 46歳 女 主婦)

〈県下でお聞きしました〉

とは？

「米原先生や佐伯さんは、昔の人だ。女が犠牲になって男を支えるのが結婚だと思っている。だから反対するんだよ。だけど、そうじゃない結婚もあると、おれは思うんだけどな…どちらかがどちらかのために、やりたいことをあきらめたり、犠牲になったりするの、おれもイヤだよ。そんなことまでして、一緒になってたって意味ないよ。きみは自由に、生きたいし、おれもやりたいことを捨てる気はない。二人がごく自然に並んで歩いていければいいんだよ。それがおれの言う結婚だよ」
「そんなこと、できるんやろか？」
「できる、おれたちなら」

〔大石静脚本・NHK朝の連続テレビ小説「ふたりっ子」より〕

助け合いながら、尊重し合いながら、生きていく人(夫とか)

(静岡市 34歳 女)

パートナーとは、力が対等でありたいと思います。これは、希望であり、目標でもあります。また、お互いの負の部分の部分を補充し合える関係が理想です。

(沼津市 37歳 女 会社員)

「パートナーシップ」という言葉のとらえ方は様々でしょうが「ある事象に対応する上での共同者」ということが、最初に浮かびます。

(菊川町 24歳 男 公務員)

どこの場でも、パートナーとして、人間として、相手を尊重した生活が大切。家には家でのパートナーがある。基本は責任、信頼、相手を尊重することである。

(菊川町 60歳 女 主婦)

私にとってのパートナーシップは、困った時に相談にのってもらったり、うれしいことがあった時は一緒に喜ぶなど、信頼でき、共感できる人だと思います。今のパートナーは家族でしょうか(結婚したら変わるかもしれません)。

(清水市 23歳 女 会社員)

パートナーは夫と言いたいが、そうではなく、上下関係のようになってしまっている。男(夫)が肩に一人で荷物をしょってガンバリ過ぎている。妻にもっと分け与えても、夫の「メンツ」がつぶれることはないのに。

(西伊豆町 48歳 女)

特集

それぞれの パートナーシップ

～自分らしい生き方を目指して～

夫婦で

細江町 あがた 英敏さん・ひでとし 智美さん
ともみ

地域活動に取り組む

平成7年度から静岡県立三ヶ日青年の家で行われている「浜名湖DE愛の日」
(以下「であいの日」)にご夫婦で取り組んでいる縣 英敏さんと智美さんにお話を伺いました。

若者による若者のための事業を

夫の英敏さんは、高校卒業と同時に地元の青年団に入団し、自治会や婦人会の方々と行事に携わり今年で16年目になります。5年前には、静岡県青年団連絡協議会の役員としても活動され、そこで、同じく役員をしていた

智美さんと出会いました。

その頃、英敏さんが親しくしていた三ヶ日青年の家の先生から「若者が集う事業を行いたいので、企画に是非若い君達の力を借りたい」という依頼がありました。

以前から「若者が楽しめる企画を実現したい」と考えていた二人は、喜んで新事業の準備



一緒に活動する縣夫妻

備に参加しました。

平成7年、二人とも県の青年団の役員を終

PARTNERSHIP



活動の拠点 三ヶ日青年の家

えて、心新たに、4月から新事業の「であいの日」に取り組みました。
英敏さんは実行委員長として、智美さんは実行委員として、共に同じ目標を持ち、歩き始めました。

新事業スタート

「であいの日」は、若者が自主的に計画し、参加して、相互の交流を図り、親睦を深めるための事業で、年に2回(夏・冬)開かれます。県内外より20歳から35歳までの男女50名が集い、1泊2日で、夏はヨットやウインドサーフィン等、冬はペインティングやクラフトなどの講座、レクリエーションを行います。

事業開催までの半年間、10回にわたる実行委員会を開きます。「男とか女とかにこだわらない人間関係をつくり、若者自身の視野を広

めてもらいたい」と熱がこもり、縣さんのお宅に場所を移してミーティングを続けることも度々あったようです。

事業は、今年の春で4年目を迎えますが、すべてが順調に進んできた訳ではありません。

実行委員といっても、地域活動やイベントの企画の経験のある委員ばかりではなく、意見を求めても何の反応もないという会議が続き、自信を失いかけた英敏さん。しかし、智美さんの明るさと励ましで、いつもの「前向きな姿勢」を取り戻した英敏さんは、まずは計画の立て方、そして運営の仕方をみんなで勉強していくことにしました。ゆつくりと歯車が回り出し、事業開催に向け前進していき

認め合うパートナーシップ

英敏さんと智美さんが平成7年に結婚されてから、以前にも増して、二人の家にはいつも仲間が訪れています。人が大好きという二人「事業の計画や準備をとおして、若いスタッフの相談にのったり、また、新しい仲間が増えることなど、楽しいことがたくさんあります」ということでした。

「彼女は、みんなの気持ちを和ませ、一つにしていくことができる人です。明るくて、自分の意見もしっかり持っています。頼りになるパートナーです」と、英敏さん。智美さんは、「こういう風に、人前で照れずに私のよいところをちゃんとほめてくれる人なんです。私の意見にもしっかりと耳を傾けてくれます。私のことを認めてくれてるんだなと思えば、とても嬉しいです」と、恥ずかしそうに語ってくださいました。



平成9年12月20日の「浜名湖DE愛の日」

いつまでも二人で

縣家の家訓は、「人が集いて福来たる」ですが、近々新しい家が完成するとのこと、そこには、たくさんの仲間が集まって話し合える広い部屋を作っているそうです。「後輩を育てることが自分の今の目標です。新しい家を起点に、魅力的な人発見」を目指してこれからも一歩ずつ歩んでいきたいと思えます。「人と出会うことの素晴らしさ、そしてその仲間が私たちの財産です」と語る二人。これからも、素敵なパートナーとして、活躍を期待しています。

人と人の中で 輝く私

浜松市 坂西バーンズ佳子さん
ばんざい けいこ

多くの社会活動の経験をお持ちで、現在、日本青年団協議会常任理事の、坂西バーンズ佳子さん。彼女にとつてのパートナーシップについてお話を伺いました。
夫ポール・坂西バーンズさん（イギリス）との家庭生活においてのパートナーシップが原点にあるのでは？

ボランティア活動との出会い

坂西さんの活動に大きな影響を与えたのは、子供のジュニアリーダーだった高校生の時、指導員の方からいろいろ伺った話と犬養道子さんの著書との出会いでした。中でも難民問題についての記述が、坂西さんの心に残っていて、さまざまな活動をしながら、いつか、この問題の解決に少しでも携わることができればと考えています。

外国へ行ってみたい。こんな思いから、18歳の時青年の船に参加しました。



結婚した当時のお二人
第26回静岡県青年の船（平成5年）で出会い、平成7年に結婚。真のパートナーシップをもち、幅広く活躍

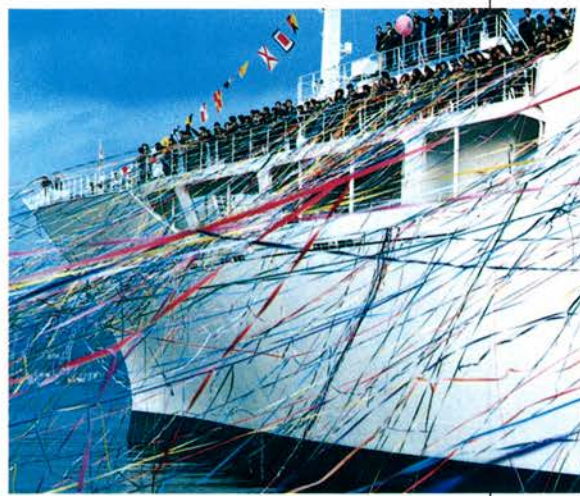
18歳から30歳までの青年が、アジアの国々を船で11日間旅するものです。船内での講師の話や、仲間とのディスカッションの中で多くのことを学ぶと共に、人と人がふれあうことのすばらしさを知りました。

そして、20歳で世界青年の船に参加したときには、「自分でも外国に行けてしまうんだ」と自分自身にも国際的な活動の可能性があると強く感じました。

福祉留学

CSV（コミュニティー・サービス・ボランティア）の募集を大学の掲示板で見つけ、福祉先進国英国へ留学しました。英国のボランティア団体の福祉プロジェクトに参加し（住まいと食事が保証される）、主にホームレスの少女を保護する施設で仕事をしました。一人ひとりを見ると、どの子もよい子であるのに、社会・家庭生活の中では、行動がスムーズでない少女たちでした。

この子どもたちには、やり直しのチャンスが必要であると強く感じました。また、活動には周囲との人間関係が重要であり、外国人



世界へ向けて船出

が他の国で何かをしようとすることの難しさを痛感しながら、7か月の滞在に終止符を打ち、日本でがんばろうという気持ちを胸に帰りました。

団体での活動の中で

英国から帰国後、ボランティア仲間との紹介で静岡県青年団連絡協議会に職員として勤務することになりました。模範となる女性の先輩に恵まれ、組織の中で「仕事する」ということを教えていただきました。事務局では、女性も男性も区別なく意見を言い、活動することができました。特に、会長は女性の能力を認めてくださる方で、いろいろと御指導をいただき、事務局長の職に私を推薦してくださいました。恵まれた環境と、仲間の応援があつて、女性としてはじめて青年団事務局の事務局長に就任することができました。

事務局長として、青年の船をはじめ、静岡県青年祭、リーダー研修会等の事業を企画・運営し、多くの青年とのふれあいを得ました。また、「実際に静岡の家庭生活を体験する中で、静岡を知ってもらいたい」と思い、ホームス

ティを組み込んだ、香港・タイの青年との交流事業も運営しました。

広がる活動の輪

その他にも海外青年の招へい事業として、JICA主催で日本ユネスコ連盟が行った「21世紀への友情計画」、国際青年の村の事業等も行いました。また、社会主義国の青年たちがどんなことを考えているのかを知りたくて、キューバでの世界青年学生祭典に日本青年団協議会派遣団の副団長として参加しました。

世界の学生の考えを知りたい。そう考えたきっかけは、大学4年生のときの経験です。ちょうど湾岸戦争の起こる2週間前でしたが、このとき海外で報道されていたことと、帰国してからの報道内容がかなり異なっていることを知りました。このことにより情報の正しい発信について学ぶことができました。

これから

静岡県青年団連絡協議会の仕事を後任に譲り、次の活動への充電期間をと、思っている矢先、先輩から日本青年団協議会の常任理事（全国で20人、任期1年）の選挙があると立候補を勧められ、現在、常任理事の職についています。活動の範囲が広がり、すべてが勉強になっています。



気さくで暖かい坂西さん

富士と共に生きた 女たち

静岡県地域女性
団体連絡協議会

平成9年11月13日、地方自治功労者として地方自治法施行50周年を記念した自治大臣表彰を受けた静岡県地域女性団体連絡協議会（以下「県地女連」）高木カヲル会長に表彰を受けられての感想と、県地女連の活動について、お話を伺いました。

表彰を受けて

Q 今回の表彰は、生活者としての女性の視点で環境や福祉の充実に努められた

長年の活動によるものと伺っています。表彰をどのように受け止めていらつしゃいますか。

A 時代・地域に求められるものを事業にしていこうという「当たり前前」の意識をしてきた」という気持ちでしたので、この表彰

また、私は、体験は多く積んでいるのですが、勉強はあまりしていないので、活動を裏づける勉強が必要です。そんな思いから、今年度はしずおか女性カレッジを受講しています。

「経験と学習したことを生かして、将来（本当にまだ夢なんです）、本当に必要な情報を提供する事業をしていきたいと思っています。人と人が出会わないと変化（感動）が起らないと思うのです。情報は、あくまでも手助けです。人と人との出会いを大切に、参加者自らが気づき、何かをつかみ取ることができ、それを大切にしたワークショップ的な事業をしていきたい」と前を見つめ明るく抱負を語ってくださいました。夫のポールさんの応援で、今年1月下旬から第10回世界青年の船（平成10年1月20日から平成10年3月19日まで）に乗船した坂西さん。輝きを増し、帰国されてからの御活躍が楽しみです。

は 驚きと共に、今までの地道な活動が認められたという喜びを実感しています。

地域のニーズに添えて

Q 県地女連は平成8年度に設立50周年を迎えられましたが、生い立ちや活動について教えてくださいませんか。

A 昭和21年10月、8郡3市の婦人会が結束し、静岡県婦人連盟が結成され、翌22年発足したのが始まりです。当時の「殺伐とした世の中を女性の力で何とかしたい」という女性の意気込みは素晴らしいものがありました。